

全国学力調査点字問題に関する一考察

— 点字問題作成の配慮 —

牟田口 辰 己

(2009年10月6日受理)

Thoughts on the Braille Problems in National Scholarship Surveys — Considerations in the preparation of braille problems —

Tatsumi Mutaguchi

Abstract: From a comparison of problems in type and braille notation on national scholarship surveys conducted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, points that need to be considered for blind students were clarified and the meaning of academic performance tests conducted over three years in the education of visually impaired students and related issues were considered. The following results were obtained. 1. The number of problems in Braille is the same as the number in type, but the number of pages was 1.5 to 3 times more. The test time was also 1.5 times longer. 2. The problems on reading and writing kanji characters in the Japanese language section were revised to be problems of meaning. Some problems were also replaced with problems on Braille notation. 3. In mathematics, dot charts are a major issue. In preparing charts with grid lines in particular special consideration should be given to tactile sense. 4. To make use of test results in education for the visually impaired, the answers of Braille test-takers should be closely analyzed. Issues that are uncovered in this analysis then need to be organized and readdressed in classroom settings.

Key words: national scholarship survey, braille, blind students

キーワード：全国学力調査, 点字, 盲児童生徒

1. はじめに

文部科学省は、平成19年から21年までの4月第3火曜日に、小学校6年生と中学校3年生を対象に、「全国学力・学習状況調査(以下、全国学力テストという)」を全国一斉に実施した。その目的は、①全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上のため、児童生徒の学力・学習状況を把握・分析し、教育結果を検証し、改善を図ること、②各教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、改善を図ることとしている(文部科学省, 2007)。特別支援学校等の対象は原則として、「特別支援学校及び特別支援学級のうち、調査対象の

教科について、下学年の内容などに代替して指導を受けている児童生徒と、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の教科の内容の指導を受けている児童生徒」を除いて実施され(高口, 2008)、盲児童生徒には点字問題が作成された。

点字問題は、晴眼児童生徒用の問題(以下、墨字問題という)をそのまま点訳するのではない。例えば、墨字問題で多用される写真や絵など、点訳が困難なものは必要があれば文章化するが、削除することが多い。また国語で必ず出題される漢字の読み書きは、意味などを問う問題に修正するのが一般的である。特に考慮すべきは算数・数学に頻出する図である。視覚で瞬時にわかる図と比べ、触覚を用いる点図は大きな制

約があり、墨字問題にある全ての情報を点図にすることは不可能に近い。したがって視覚と触覚の特性の違いを踏まえた必要な修正がなされなければならない。

そこで本稿では、墨字問題と点字問題を比較することにより、盲児童生徒に必要な配慮点を明らかにするとともに、3カ年にわたって実施された全国学力テストの視覚障害教育における意義とその課題を考察する。

2. 方法

(1) 対象とした試験問題

平成19年度～21年度「全国学力テスト」問題の小学校国語 AB と算数 AB、および中学校国語 AB と数学 AB の各問題と、これらを点訳した点字問題を比較した。

(2) 比較の観点

- 1) 各科目の問題数、ページ数および試験時間
- 2) 国語においては、漢字に関わる墨字問題とこれに対する点字問題の修正内容、点字表記に関する代替問題の有無とその内容、その他特記すべき事項
- 3) 算数・数学においては、図表の取り扱い、図形問題の修正内容と点図の表現方法

3. 結果と考察

(1) 問題数、ページ数と試験時間

Table 1は、国語および算数・数学の3カ年の問題数、ページ数と試験時間について、墨字問題と点字問題を比較したものである。大問数は、墨字問題に年度間の差はあるが、これを点訳した点字問題は各年度とも墨字と同数であり、削除された問題はなかった。しかし、ページ数では墨字と点字に大きな差が見られた。各年度の墨字問題に対する点字問題ページ数の比率を比較すると、国語では、小学校Aの3カ年平均は1.79倍、小学校Bは1.40倍であり、中学校Aでは2.03倍、Bは1.89倍であった。この比率の違いは、触覚的認知の特性から点字の文字サイズは一定であるが、墨字問題では中学校の文字サイズが小学校に比べて小さいことにも一因があると思われる。顕著だったのは、20年中学校B（網掛け部分）の墨字15ページに対する点字38ページの2.53倍である。この問題には文字サイズの小さい脚注が多用されていた。算数・数学では、小学校Aの3カ年平均は1.33倍、小学校Bは1.62倍であり、

Table 1 問題数、ページ数、試験時間の比較

項目	年度	小学校国語		中学校国語		小学校算数		中学校数学			
		A	B	A	B	A	B	A	B		
大問数	H19	墨字	10	4	8	3	7	6	15	6	
		点字									
	H20	墨字	9	4	6	3	9	5	15	6	
		点字									
	H21	墨字	9	4	8	3	8	5	13	5	
		点字									
ページ数	H19	墨字	11	16	21	16	8	17	15	12	
		点字	19	19	30	30	12	26	54	23	
	H20	墨字	12	19	17	15	9	15	25	10	
		点字	22	29	39	38	11	30	40	22	
	H21	墨字	10	14	17	16	11	18	25	10	
		点字	18	21	40	20	14	24	40	32	
	試験時間 (分)	いずれも	墨字	20	40	45	45	20	40	45	45
			点字	30	60	70	70	30	60	70	70

中学校Aでは2.27倍、Bは2.44倍であった。ここで際だつのが19年中学校A（網掛け部分）であり、墨字15ページに対して点字54ページとその比率は3.60倍となっていた。これは、数学Aの図版の多さによるものである。なお試験時間はいずれも墨字の1.5倍であった。この試験時間延長の配慮は、大学入試センター試験と同じである。

(2) 国語問題の修正

1) 漢字の読み書き問題

学習指導要領（文部科学省，2009）では、「視覚障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校」（以下、盲学校という）の小学部各教科の項に、「(2) 児童の視覚障害の状態等に応じて、点字又は普通の文字の読み書きを系統的に指導し、習熟させること。なお、点字を常用して学習する児童に対しても、漢字・漢語の理解を促すため、児童の発達の段階等に応じて適切な指導が行われるようにすること」とされ、漢字・漢語について特に留意した指導を求めている。しかしこれは、晴眼児同様に漢字の字形を含めてその学習内容全てを求めたものではなく、知識と理解にとどめている。したがって、晴眼児童生徒用の問題をそのまま課すことはせず、必要な修正が行われる。

小学校と中学校A問題にはいずれも漢字が出題されており、その修正の一例として20年小学校国語Aを取り上げる。墨字問題1は読みであり、点字では意味を問う問題に修正されていることがわかる。問題の(2)「承知」は「納得」に変更されており、これは同音異義語の可能性、あるいは、この意味を問うには難易度が高いとの判断によるものと推察される。また、(3)「勢い」は訓読みであるため、この漢字を使った熟語「勢力」に変更し、本文も修正されていた。

墨字問題2は書きである。点字問題では、同音異義の選択問題に修正されていた。(1) ボールを「な」げ

る、は訓読みであるため、問題文を、(1) みんなで「どう」する に変え、「動」を用いる熟語を選択させるものである。選択肢は、「同」級生、労「働」者、児「童」会、そして「動」物園であり、これらの選択肢の選定にあたっては、当該学年の学習内容を考慮して修正する必要がある。

この例に示した読み書き問題は3カ年に共通した出題形式となっているが、他の大問の中にも漢字を問うものがあつた。Fig. 1は20年小学校国語A第2問である。上段に示した墨字問題では、「かいじょう」の同音異義語である「会場」と「開場」を意味の説明から正しく漢字を書き取らせて適切な使い方を選択させる問題と、「おかえり(帰)」の漢字の書き取りであつた。

【墨字問題1】 (20年小学校国語Aより)
漢字をひらがなに直して書きましょう。

(1) 自然を「保護」する。
(2) 全員がすぐに「承知」した。
(3) 水が「勢」いよく流れる。

【点字問題1】
次の(1)～(3)の文「 」で示した部分の語について、意味を答えましょう。

(1) 自然を「保護」する。
(2) 全員がすぐに「納得」した。
(3) 台風の「勢力」が強まった。

【墨字問題2】 (20年小学校国語Aより)
ひらがなを漢字に直して、ていねいに書きましょう。

(1) ボールを「な」げる
(2) かぜを「よほう」する。
(3) 駅まで歩いて「おうふく」する

【点字問題2】
次の(1)～(3)までの文の「 」で示した部分と同じ意味の漢字を用いるものを、あとのアからエまでのの中からそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きましょう。

(1) みんなで い「どう」する。
ア. 「どう」きゅうせい
イ. ろう「どう」しゃ
ウ. じ「どう」かい
エ. 「どう」おつえん

(2) かぜをよ「ほう」する。
ア. 「ほう」ふうりん
イ. 「ほう」えんきょう
ウ. 「ほう」りよく
エ. てつ「ほう」

(3) 駅まで歩いておう「ふく」する。
ア. さぎょう「ふく」
イ. 「ふく」ししせつ
ウ. めいよかい「ふく」
エ. 「ふく」かいちょう

下段が点字問題である。ここでは、意味の説明から「海上」「開場」の対義語を書かせる問題と、「おかえり(帰)」の漢字の音読みを問う問題に修正されていた。このように、漢字の読み書きは、意味や音訓の使い方を問う問題に修正されていることが分かる。

2) 書写等に関する問題

墨字問題では、書写等に関する問題が散見された。Fig. 2はその例である。左の2問は、20年と21年の中学校Aにあつた楷書や行書に関する問題で、右に示した20年中学校Aでは宅配便の送り状を取り上げ、見やすい住所の書き方を問うものである。点字を常用する盲児童生徒にとって、このような視覚情報に依存する出題は適切とは言えない。書写は盲学校で全く指導し

【ポスターの下書き】

☆劇の発表会のお知らせ☆
つゆくさ小学校6年1組一同
わたしたち6年1組では、劇の発表会をすることになりました。
(発表する作品)「海と鳥」(谷口 達作)
1 発表の日：平成20年6月4日(水)
2 時 間：午後2時から午後3時まで
(かいじょうは、30分前)
3 場 所：つゆくさ小学校体育館
◆お「かえり」のときには、感じたことや気づいたことをアンケートに書いてください。

二 部「かいじょう」を辞書で調べてみたところ、次のように書いてありました。

ア「一」 会議や集まりなどが行われる場所。
イ「海」 海の上。海面。
ウ「一」 集会や行事などをする場所を聞いて人を入れること。
エ「二」 二階以上の建物の上の階。

(1) アとウの「一」に当てはまる漢字をていねいに書きましょう。
(2) 部「かいじょう」を漢字に直すと、アからエまでのどの漢字になりますか。正しいものをアからエまでの中から一つ選んで、その記号を書ききましょう。

二 部「おかえり」の「かえり」の音読みを書ききましょう。

一 部「かいじょう」を辞書で調べてみたところ、次のアからエのように書いてありました。

ア「一」 会議や集まりなどが行われる場所。
イ「海」 海の上。海面。
ウ「一」 集会や行事などをする場所を聞いて人を入れること。
エ「二」 二階以上の建物の上の階。

(1) (イ)と(ウ)の語の対義語をそれぞれ書きましょう。
(2) 部「かいじょう」の意味として、正しいものをアからエまでの中から一つ選んで、その記号を書ききましょう。

Fig. 1 漢字問題の修正例



Fig. 2 書写の問題例 (20・21年中学校A)

ないわけではないが、特に毛筆は経験程度にとどめており、その目的は墨字の多様性の理解であり、きれいに書くことを求めるものではない。

そこでこのような場合、点字問題では点字表記に換する内容等に代替するか、あるいは削除することになる。この例では、次のように差し替えられていた。

【全く別の問題への差し替え】

文末が「です・ます」で終わる文体を説明したものととして最も適切なものを、あとの1 から4の中から一つ選びなさい。

- 1 常体という。
- 2 筆記体という。
- 3 敬体という。
- 4 文語体という。

(20年中学校A、楷書行書問題の代替)

【点字表記問題への差し替え】

山本さんは、次の文章を読んでいて、点字表記の上で誤りがあることに気づきました。山本さんが誤りとしたものを、あとの1 から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 ナイテモ□ダレモ□フリムイテワ□クレナイヨ。
- 2 アスカラ□ガンバッチ□イコー。
- 3 ヒトリ□アタリ、2ホンズツ□トツテ□クダサイ。
- 4 アア□イエバ、コー□イウ。

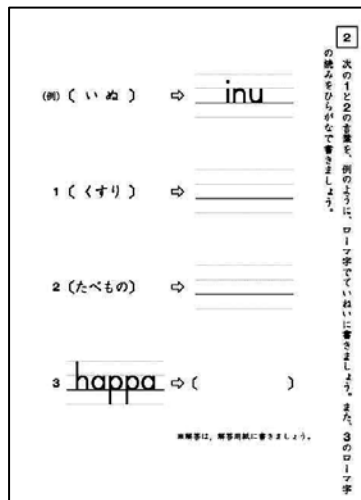
(21年中学校Aの代替問題、□はマス空けを示す)

21年小学校Aには、葉書の書き方があった。これは、相手の住所と宛名、自分の住所と氏名の順序を問うものである。点字問題では、点字郵便の書き方に修正されており、原問を活かした工夫が見られた。

3) その他特記すべき事項

①ローマ字

21年小学校Aで初めてローマ字が出題された。ローマ字は点字教科書にも掲載されており、出題すること自体に問題はないと考える。しかし晴眼児童生徒は、駅名表示など日常生活の中でローマ字に接する機会が多いが、盲児童生徒はこのような機会は無であること、また日本語もアルファベットも全て同じ六点で表記する点字と比較すると、その難易度は極めて高いと思われる。この問題の正答率が気になるところである。



②解答の文字数指定

国語問題に頻出するのが、「80文字以上100字以内で書きなさい」といった解答の文字数指定である。点字は仮名文字表記のため、そのままの数字は当てはまらない。この場合は正答を点字で書いてから、そのマスを指定することが必要となる。この場合、点字問題では「140マス以上180マス以内」と、約1.8倍になっていた。

(3) 算数・数学問題における図版の修正

1) 図版の数

Table 2は、算数A B、数学A Bの墨字問題と点字問題に掲載された3カ年の図版の総数とその内訳を示したものである。図版は、三角形や円など単純なものを「図形」、また格子線のない一次関数や放物線などを「グラフ」、さらに格子線を含むグラフなどを「方眼」と名付け、これらのほかに、地図、見取図、投影図、

展開図、そして数直線（樹形図を含む）に分類した。両者を比較すると、算数Aは同数であるが、算数Bおよび数学A Bのいずれも、点字が墨字より少ないことが分かる。これは、同一の図版は削除したり、グラフは数値で示した表に修正されたことによるものであった。また見取図は点字問題には用いられておらず、投影図に修正されるかあるいは削除されていた。その他の図版はほとんどが点図にされていた。

2) 図版の取り扱い

以下では、出題された中から特徴的な図版を取り上げて、点字問題における修正方法を検討した。

① 図形

Fig. 3は、21年算数A第4問に出題されたものである。墨字（左図）では、分度器の絵を重ねて数値を読み取らせる問題であるが、点字（右図）では、点図で示された角の大きさを触らせて、(65°, 90°, 115°, 180°)の中から選択させる問題に修正されていた。盲児童生徒用の分度器は市販されており、墨字問題同様に点図にすることは可能である。しかし図が煩雑になることと、鋭角、直角、鈍角、水平の違いを点図だけで読み取らせる基本的な問題に修正したことは興味深い。実はこの直前の墨字問題に、千円札の長いほうの辺の長さを、図は示さずに(3 cm, 15 cm, 30 cm, 50 cm)から選択させるものがあった。点字も同一の問題であり、このように長さや角度の直感的な理解は、特に盲児童生徒には大切といえる。

もう一つ、図の修正例として21年数学B第1問にあった線対称を取り上げる。Fig. 4上段に示した2枚が第1問の墨字問題2ページ分である。その中の波線で囲んだ「3回折り」の説明図に注目したい。下の図は、点字問題に掲載されたものを拡大して示したものである。なおこの図は、教師用に作成された「点字問

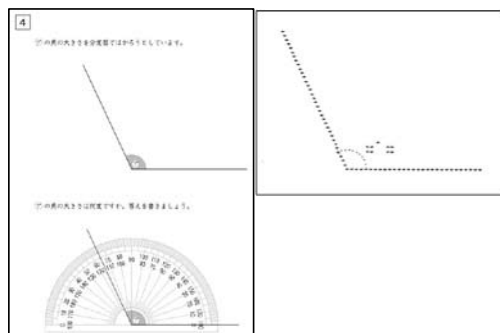


Fig. 3 角度の測定 (21年算数A第4問)

Table 2 算数・数学における図版の数とその内訳

	図版の 総数	図版の内訳							
		図形	グラフ	方眼	地図	見取図	投影図	展開図	数直線
算数A	墨字	25	20	1	2				2
	点字	25	20	1	2				2
算数B	墨字	51	17	17	3	11	1	2	
	点字	36	15	7	3	9		2	
数学A	墨字	121	36	24	10		40		7 4
	点字	109	35	23	10		30		7 4
数学B	墨字	47	42	1	3		1		
	点字	39	35	1	3				



Fig. 4 図の修正例 (21年数学B第1問, 上段の2つは墨字, 下段は修正された点図)

題の墨字版」であり、実際の点字問題では、ここにある折り方を説明した5つの図が、点字3ページになっていることに留意して頂きたい。墨字「3回折り」の図と点図と比較すると、例示の図が簡略化されているのが分かる。これも、一目で分かる墨字と触覚による点図の特性を考慮したものと思われる。また点字では、墨字左ページ右上にある「紋切り遊び」の写真は削除されていたが、その他の図はすべて点図で掲載されており、この第1問の墨字2ページが点図では12ページになっていた。その理由は、触れて理解できる点図にするには、一定の大きさが必要だという配慮からである。

② グラフ

19年算数B第3問には棒グラフと帯グラフがあり、Fig. 5に棒グラフの例を示した。漁業に携わる人の数を、男性の年齢別3グループと女性1グループの4つに分け、83年、93年、2003年と10年ごとにその変化を示したものである。横軸には3つの年ごとに、中点(通

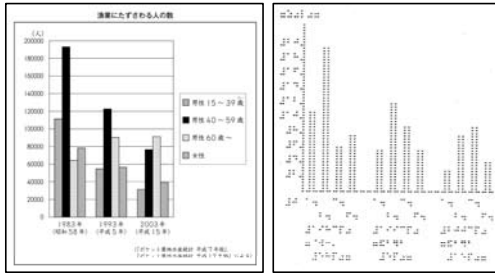


Fig. 5 棒グラフ (19年算数B第3問)

常の点字に用いる大きさの点)を2列、つまり点字の「め」の字を縦につなげた棒で4本の棒グラフがあり、計12本が並んでいる。縦軸の値を示す水平方向の補助線は削除され、縦横の軸を含めすべて中点が使われていた。

③地図と投影図

Fig. 6は、19年度算数B第5問にあった地図の例である。長方形の中にさらに平行な横線が1本、その中に、斜めに走る平行な道が3本ある道路図で、長方形の左下の交差点から右上の交差点までの道のりを問うものである。図はすべて中点を用い、墨字にある太線は中点の二重線で描かれていた。Fig. 7は、見取図を投影図に修正した例である。墨字問題に掲載された直方体や円柱などの見取図は、点字問題では「上から見た図」と「前から見た図」という二枚の投影図に修正して掲載されていた。立体を平面に描く方法として通常用いられる見取図は、盲児童生徒の場合、視覚経験

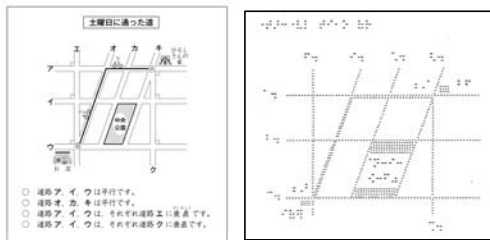


Fig. 6 地図の一例 (19年度算数B第5問)

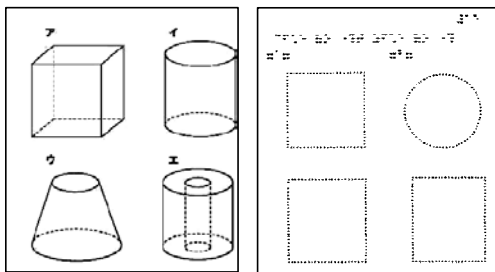


Fig. 7 見取図の修正例 (19年数学A第5問)

がないのでその理解は極めて困難となる。点図作成の参考となる点字教科書の編集方針を示した点字教科書編集資料には、「見取図は原則として削除し、投影図法の表現や展開図、または文章化することによって理解を促すようにした。投影図法では、『上から見た図』の下に『正面(横)から見た図』に置くことを原則とした」(文部科学省, 2005)とあり、見取図を投影図に修正する方法は、点図作成の大原則と言える。

④格子線のある方眼

最も課題として指摘したいのが格子線のある方眼である。Fig. 8に、19年算数A第6問にあった凸点格子線の例を示した。凸点格子線とは、縦横の格子線を小凸点(通常の点字に用いる大きさの点より小さな点)で表現し、設問対象となる図(Fig. 8では、平行四辺形の2辺を示す線分)は通常の点字に用いる大きさの中凸点で示したもので、いずれも凸点で表現されている。この例は、方眼紙上に平行四辺形の隣り合う2辺のみが示され、もう一つの頂点を1から5まで番号のついた5つの点から同定させる問題である。点図は格子線が小凸点で表現され、その上に平行四辺形の2辺が中点で描かれていた。詳細に見ると選択肢5の位置は墨字問題とは異なり、一目盛り下げて取られていることがわかる。また選択肢周辺の小凸点の格子線は削除されており、これらは触察上の配慮であろうと推測できる。しかしながら、点の大きさを変えているとはいえ、格子線、線分、選択肢番号の点字、そして同定すべき頂点の4点種全てが凸点で示されていること、さらに選択肢番号の数字と頂点を示す大点(中点より一回り大きい点)が近接していることから、触察で正確に読み取ることは困難であろうと思われた。

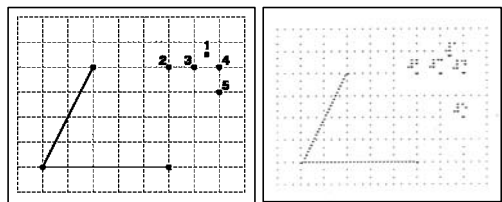


Fig. 8 凸点格子線の例 (19年度算数A第6問)

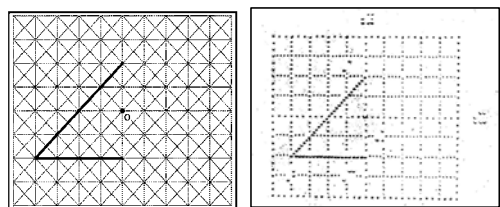


Fig. 9 凹点格子線の例 (20年数学A第4問)

ところが、20・21年度の格子線を含む図に大きな変化が見られた。Fig. 9は20年数学A第4問にあった凹線格子線で表現された図である。凹線とは、へこませた点を並べるもので「裏点」ともいい、軽く押さえるとその線を認知することができる。左図に示した墨字問題は、平行四辺形の隣り合う2辺が与えられ、残る2辺を斜線も入った方眼上に実際に描かせる問題である。点字では描くことは問えないため、右図に示した点字問題は、小凸点で表現したXY軸を追加し、残る頂点の座標を答えさせるように修正されていた。注目すべきは格子線に凹点、つまり裏点が使われていたことである。なお、この図は点図をスキャナで取り込んで画像修正を施したものであり、紙面からは凹凸が分からないが、平行四辺形の2辺とXY軸が凸点、縦横の格子線が凹点である。20年と21年はこの凹点格子線が用いられていた。このように点の位置を特定する課題などの複雑な図版では、格子線は凹点で示されるのが一般的であるが、19年問題の点図には用いられていなかった。これは、点図作成の方法が異なっていたのではないかと、つまり19年の点図は、パソコンを使用した点図作成ソフトを活用し、点字プリンタで出力したのではないかと考えられる。文部科学省著作点字教科書などの出版物の図版は、点字出版機関の点字製版師といわれる専門職員が亜鉛板に一点一点を打刻する方法で原版を作って製版されており、点の大きさなどの表現力が豊富で、手で触って分かりやすいように不要な点は削除するといった柔軟な対応が可能であるため、触覚的に認知しやすい特徴がある。もしそうであればパソコンによる点図は今回のような全国的に提供された図版に初めて使用されたのではないかとと思われる。さらにいえば、20年と21年はともに凹点格子線を用いていたが、21年の点図は大点と中点の大きさの区別が困難であった。現在の点字プリンタによる印刷はこの区別がつきづらい特性があることから、21年問題の印刷も点図作成ソフトを用いたパソコン点訳によるものではないとも考えられる。

4. 点字問題を通して浮かび上がる課題

全国学力テストについては結果の公開など様々な論議があるが、点字問題を通して浮かび上がる課題を2点指摘したい。1つは図版に関する点、そして本テストの視覚障害教育における意義である。

(1) 図版の課題

点字図版(点図)を検討して気づくことは、墨字問題と点字問題に掲載された図版の数がほとんど同一で

あったことである。そのためページ数が大幅に増え、1.5倍の時間延長があったにせよ、受験した盲児童生徒が真の学力を発揮できたかという不安はぬぐえない。視覚とは異なり、触察による点図の読み取りには多大な時間を要するので、ややもすれば問題の読み取りに試験時間のほとんどを費やしてしまうことさえ懸念される。墨字問題を可能な限り活かして点字問題を作成することが基本とはいえ、解答に直接関係のない図版は削除する、あるいは表や文章に修正するといった配慮が必要であろう(一部でその配慮は見られたが)。特に格子線を含む方眼上の座標を特定する課題では、点図の質が解答そのものに多大な影響を及ぼす。3カ年の問題を詳細に検証した結果、点字教科書の印刷方法である従来の亜鉛板製版と点字プリンタによる印刷が混在して使用されたことが推察された。長尾(2009)は点字プリンタによる点図について、凸点格子線と凹点格子線の読み取りやすさを比較した結果、凸点格子線は凹点格子線に比べ有意に時間を要したことから、格子線を含む点図には凹点格子線が適切であることを実験的に明らかにした。さらに分かりやすい表現として各座標の交点に小凸点を併記する方法も提案している。近年パソコンによる点図は、ボランティア作成の点訳本のみならず、通常の学級で学ぶ盲児童生徒用の点字教科書で多用されている印刷方法である。しかし現行の点字プリンタは、表現できる3つの点種のうち大点と中点の区別がつきにくい欠点があり、亜鉛板製版と比較して表現の自由度は狭い。したがって今後は、表現力の豊富な点字プリンタの開発とともに、点図のlegibilityを踏まえたパソコン図版作成用マニュアルを早急に整備することが望まれる。

(2) 視覚障害教育における本テストの意義

点字による試験問題は、その表記とレイアウトに特徴がある(日本点字委員会, 2007)。例えば墨字問題に類出する設問用の「下線・傍線・波線」は、点字では試験問題にしか用いない特有の囲み記号が使用される。また墨字問題のように指定された解答用紙を使わないため、採点者が答案を間違わないように、解答の際には問題用紙と同じ形式の番号表示を用いて表記しなければならない。さらに点字は「消しゴム」が使えない。したがって訂正するときは必ず「ていせい」と表記して書き直す必要がある。このような様々な点字特有の試験問題形式と解答方法を盲児童生徒はどの程度経験しているであろうか。特に小学部児童は、通常の評価にペーパーテスト、しかも公式な出題方法によるテストを経験する機会は少なく、盲児童自身が試験問題に慣れていないという懸念も生じてくる。実は筆者も盲学校小学部教員として勤務していた時、今回の

試験問題のような正式な方法で出題していなかった。もしそのような状態で、今回の学力テストを受験させていたら児童は戸惑い、この点でも十分な実力が発揮できたかどうか心配になった。これらの課題の解決には、盲学校教師による適切な指導以外にないのである。点字試験問題の作成方法については、筑波大学附属視覚特別支援学校編「視覚障害教育ブックレット」(2008)に詳細な記述があり、視覚障害教育に携わる教師には是非とも参考にして頂きたい。

国立教育政策研究所(2009)は、受験者数と正答率を公表している。それによれば、21年の受験者数は小学校が約115万人に対して特別支援学校の算数Aは467人、中学校は約108万人に対し特別支援学校の数学Aは722人であった。しかし特別支援学校の障害種別人数や点字受験者数の詳細は非公表である。全国盲学校小学部児童の在籍状況から推察すると、通常の学級で学ぶ盲児を加えても点字受験者は50名に満たないものと思われる。正答率は、小学校算数Aは78.8%、中学校数Aは63.4%であった。これも特別支援学校の結果は非公表であり、点字受験者の正答率は不明である。本稿で取り上げた国語における漢字の代替問題、ローマ字、点字表記を問う問題、算数・数学の点図を用いた問題、特に格子線のある問題について、その正答率はどうか、3年間実施された全国学力テストの点字問題とその解答結果から得られる視覚障害教育に対する問題提起は少なくないと考える。これらが公表されれば点字問題の妥当性を含めて、盲学校での指導のあり方をも振り返ることのできる貴重な資料となる。本学力テストの趣旨にも鑑み、是非とも点字受験者の解答状況を詳細に分析の上、そこから浮かび上がる課題を整理して学校現場に還元して欲しいものであ

る。このことが、視覚障害教育の専門性の向上につながると思う。

全国学力テストの来年度以降の実施は未定という。たとえ全国規模でなくとも、点字問題による出題が継続されることを望むものであり、社会科あるいは理科の他教科も実施されることも必要であろう。

【引用文献】

国立教育政策研究所(2009)平成21年度全国学力・学習状況調査, 調査結果について

<http://www.nier.go.jp/09chousakekka/index.htm>

高口 努(2008)全国学力・学習状況調査の目的と活用に関する期待, 日本教育学会中国地区研究活動公開シンポジウム並びに研究会, 3-6, 日本教育学会中国地区研究活動準備委員会

筑波大学附属視覚特別支援学校視覚障害教育ブックレット編集委員会(2008)視覚障害教育ブックレット「試験問題特集」, ジアース教育新社

長尾 博(2009)点図化されたグラフ格子線の表現方法に関する研究一点字プリンタ出力によるグラフを用いた実験的研究を通して一, 平成20年度広島大学大学院教育学研究科修士論文(未刊行)

日本点字委員会(2007)試験問題の点字表記, 第2版, 文部科学省(2009)特別支援学校学習指導要領, 海文堂出版

文部科学省(2007)全国的な学力調査について

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/index.htm

文部科学省初中局特別支援教育課(2005)盲学校小学部点字教科書編集資料